武蔵野ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を楽しみながら学ぶ

戦争の記録

毎年11月24日は「武蔵野市平和の日」。昨夏は戦後70年の節目を迎えましたが、戦争の記憶を次世代につなぐことは平和への礎を築く一歩となります。今回は、戦時中の武蔵野町をたどります。

武蔵野上空を飛行するB29（米国議会図書館蔵）

昭和6（1931）年の満州事変に端を発する戦争は、昭和20（1945）年にポツダム宣言を受諾し終戦となるまで、断続的に続くことになります。そういった中、武蔵野町（現在の武蔵野市）は戦争でどのような影響を受けたのでしょうか。それは昭和13（1938）年、武蔵野町西窪（現在の緑町）に、中島飛行機株式会社の武蔵野製作所が開設されたことによって、大きく変化し始めたと言っても過言ではありません。

大軍需工場を抱えるまちへ変化した武蔵野町

大正6（1917）年に群馬県尾島町（現在の太田市）に飛行機研究所として創業した中島飛行機は、日進月歩で事業を拡大。大正14（1925）年には東京工場（後の東京製作所）を井荻町上井草（現在の杉並区桃井）に設置し、エンジンの本格的な生産を開始しました。そして日中戦争の勃発により航空機の需要が増し、陸軍の増産要請もあって昭和13年に武蔵野製作所の開設に至ったのです。

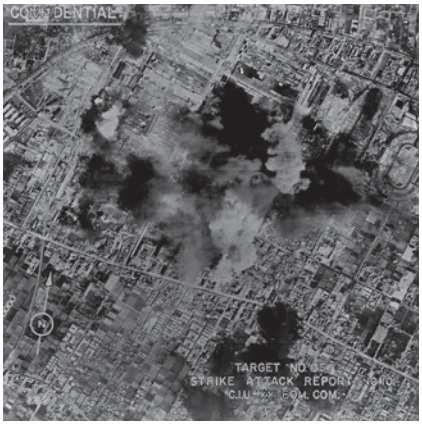
同製作所は陸軍専用のエンジン工場でしたが、昭和16（1941）年には、西側隣地に海軍専用の多摩製作所も開設されました。当初二つの製作所は独立して開発・製造を行っていましたが、軍需省からの命令もあり、武蔵製作所として昭和18（1943）年に合併。それぞれ東工場、西工場と呼ばれました。中島飛行機に関連する中小企業などは武蔵野町に多数進出し、横河電機製作所吉祥寺工場も軍事機器の生産に転換するなど、農地が中心だった武蔵野町は大軍需工場を抱えるまちへと変わっていきました。

当時の技術を結集した中島飛行機武蔵製作所

武蔵製作所はドイツのクルップ社をモデルとし、当時の技術を結集してつくられた工場だったとされています。所内には地下通路が張り巡らされ、各施設を地下道でつなぐことで、物や人の移動を効率良く行い、一般の工員も正門を通らず、地下道を経由して通勤していたといわれています。今年8月には、工場跡地である都立武蔵野中央公園の拡張工事の際、土中に地下道の床面と見られる幅3メートルほどのコンクリート塊が確認されています。

開設当時の中島飛行機武蔵野製作所本館（富士重工業株式会社蔵）

武蔵野女子学院から動員された学徒（提供：武蔵野女子学院卒業生　丹羽慈子氏）



昭和20（1945）年4月7日、爆撃を受ける武蔵製作所

爆撃を受けた工場内部

（右2点ともに米国国立公文書館蔵　中島飛行機武蔵製作所関連資料調査にて収集）

製作所は24時間休むことなく稼働。約5万人が交代で働き、その中には学徒勤労動員の若い姿も多くありました。学徒勤労動員とは、軍に召集された成人男性の労働力を補充するために、主に中等学校（現在の中学校）以上に相当する学生・生徒が動員されたことをいいます。保谷町（現在の西東京市）にあった武蔵野女子学院をはじめ、近隣の都立第五商業学校や自由学園など多くの学校から学徒が動員されました。武蔵野女子学院に残る記録によれば、本格的な動員が始まったのは、戦況が悪化していく昭和19（1944）年からで、生徒たちはカーキ色の制服に身を包み、頭には日の丸の鉢巻き、腕には校名を記した腕章をして工場で働いていたとされています。

長引く戦争のなか 武蔵野町にも爆撃の被害が

軍需産業の一大拠点であった武蔵製作所と関連企業の存在は、武蔵野町を大きく発展させました。人口は著しく増加し、三鷹駅には武蔵野口（現在の北口）を開設。しかしその一方で、米軍の攻撃の標的となって、多くの市民が被害に遭ったことも否めません。

昭和19年7月、米軍がサイパン島を陥落させると、航空機による東京への直接攻撃が可能になりました。そして同年11月24日、マリアナ諸島の基地を発進したB29が、初めて東京を攻撃する際に目標としたのは、武蔵製作所だったのです。以降終戦まで、9回に及ぶ爆撃があり、1カ所の工場に対してここまで頻繁に爆撃を行う例は稀（まれ）なことから、米軍がいかに武蔵製作所を重要な拠点と位置付けていたかがうかがえます。爆撃は特定の目標に爆弾を投下する「精密爆撃」と呼ばれるものでしたが、言葉とは裏腹に命中率は低く、工場周辺の住民がその犠牲となったのです。また、爆撃機を迎撃するため高射砲陣地が軍により設置され、製作所周辺の農地は陣地設置のために提供を余儀なくされました。

広島に原子爆弾が投下される1週間前の昭和20（1945）年7月には、後に長崎で使用されるものと同形状の模擬原子爆弾（プルトニウムではなく通常の爆薬）が、実戦訓練として武蔵製作所を標的に落とされました。爆弾は製作所の北側（現在の西東京市柳沢）の畑に着弾してさく裂し、付近の住民が犠牲となりました。

度重なる爆撃により壊滅的な被害に遭った武蔵製作所は、武蔵野町から各地へ工場機能を移転して生産を続けましたが、その後まもなく終戦を迎えることになります。

姿を変えた 製作所関連跡地の現在

現在、製作所跡地はさまざまな形に姿を変えています。西工場跡地は主に武蔵野中央公園に、東工場跡地は市役所、高齢者総合センター、NTT武蔵野研究開発センタ、UR武蔵野緑町パークタウンなどになりました。また、製作所の関連施設であった中島飛行機武蔵第一青年学校跡地は市立第四中学校に、付属病院跡地は八幡町公園をはじめとした住宅地になっています。

なお、戦時中の軍需工場や軍事施設は武蔵野町に留まらず、田無や三鷹、府中、立川などにも及び、多摩地区に広く分布していました。現在、その多くは公園や住宅地、商業地へと大きく姿を変えています。皆さんが知っているあの場所も、実は戦争と深いつながりのある場所かもしれません。

取材・文／山口朋恵　参考／企画展『戦争と武蔵野Ⅱ』（武蔵野ふるさと歴史館戦争資料展示）
参考資料／『あの日を忘れないために～武蔵野女子学院生の戦争証言集』（武蔵野女子学院同窓会くれない会編）